

なお座右に置きたい書

誰しも常に座右に置いて参照する研究書を持っているであろう。私にとっては、本書（旧版）がそのひとつであった。まだ学生だった頃から本書が身近にあったことは、私には大きな幸いであった。魏晉南北朝史研究に志した人で、そのような思いを抱く人は他にも少なくないのではないか。

その『北朝胡姓考』の修訂版がこのたび世に出た。一九五八年に北京の科学出版社が刊行してからちょうど五〇年経っている。一九六二年の中華書局重印本があるが、それも入手困難であったから（ちなみに私が使っていたのは台湾で複印されたもの）、本書に対する需要の高さからいえばもっと早くに刊行されてよかったのではという思いはあるが、魏晉南北朝史研究者にとっては慶賀すべきことであ

る。

ここで他の分野の方のために、本書の内容をごく簡単に紹介しておかねばなるまい。非漢族の君主による政權が中国の北半部を支配した五胡・北朝期の場合、その歴史を正確に把握するためには、史料に登場する人物の民族成分を正確に把握することが必須となる。非漢族は或いは出身部族名を音訳した姓を用い（当然異なる音訳という問題が発生する）、或いは漢族風に改めた姓を用いた。場合によっては、漢族名族に自らの家系をすべりこませることも行われる。それらの姓を弁別し、それぞれの姓に属する人物を特定することは容易なことではない。本書はその困難な作業に正面から取り組んでいる。『魏書』官氏志には北魏時代の非漢族の姓を掲げているが、宗室十姓・

窪添慶文

姚薇元著

北朝胡姓考（修訂本）

中華書局

二〇〇七年「二七九三円」

勳臣八姓・内入諸姓・四方諸姓というその分類と掲載順序に従ってそれら諸姓を検討した内容を、「内篇」に置く。扱われた姓の数は、それぞれ一〇・六（二姓は四方諸姓で扱う）・六八・三四である。官氏志以外にみられる諸姓は「外篇」に収め、東胡（一三）・東夷（三）・匈奴（二三）・高車（九）・羌（二二）・氐（五）・賁（一）・羯（六）・西域（一一）という整理で扱っている。合計一九三姓である。論ずる時期は魏晉南北朝期を中心とし、その前後の時代に及ぶが、当然のことながら北朝を継承した隋唐期の関係人物が多く挙げられることになる。とりあげた姓と人物の検討に当たっては、正史を中心とする史書、姓氏関係書をはじめとする地理書・韻書・類

書・文集・金石関係書など豊富な漢籍類のほか、近代の研究書（白鳥庫吉などの日本人、漢訳によるシャパンヌなど欧米人の研究を含む）を用いて、博引傍証ぶりは際だっている。その結果、旧来の理解の訂正、新発見が数多い。

修訂版は、出版説明によると、著者姚薇元先生（一九〇五—八五）自らが晩年に行っておられた修訂に依拠したという。

その修訂の内容は、増補、引用史料の是正と補充、民族感情に配慮した改訂である。また旧版の誤りなどを正したという。どこまでが著者の修訂なのか、今回の修訂の協力者によるものか判然としないが、恐らく、誤植など単純な誤りの訂正を除けば姚先生自らの修訂で

あらうと思われる。では具体的にどういうところが修訂されているのだろうか。民族感情に関わる表現については「夷」の語が「胡」に、「種類」が「族」に改められ、「酋」を含んだ表現が書き直され、「冒託」などの「冒」字は避けられているなどの例がかなりある。これは新中国の民族政策からして理解できる改訂である。引用史料については、旧版の場合、紙数の関係から節略引用が目立っていた。例えば、並列される官職の一部を削除したり、同時に行動した別人物の官職や名前を除いたりしている。これは本書の目的が特定の姓氏の検討にあるのであるから、それに直接関係ない記事はカットしても大きな問題にはならない故

であらうが、削除だけでは文意が通らなくなる場合には書き換えも行っている。これらについて修訂版は該当箇所全文引用に改めているのである（凡例に節略の旨を記しているが、旧版の凡例にはこのことはみえない）。

細かな点でいえば、修訂版は随分多くの手直しを行っている。文字の異同や比較の場合には括弧を多用する、括弧の内部分では二重括弧を用いる、旧版では傍らに付した波線の切れ目で判断せざるをえなかった固有名詞の並列の場合には並列記号を用いる、「志」など書名（篇名を含む）の一部と考えられる語には波線を付す、他の事例からみて改行すべき箇所は改行する、旧版では左ページに置かれていた

阿部幸夫編著

杭州月明

夏衍日本留学
日記一九二五

夏衍「日本日記」の完訳。事項・人物の注釈はもとより日記の周辺と行間に見え隠れすることについても解説。資料として初期の創作、詩、エッセイも収む。図版多数。

2800円

▼同じ著者の好評既刊書

魯迅書簡と詩箋

6300円

佐藤 仁著

宋代の春秋学

宋代士大夫の
思考世界

經学に新風を吹き込み、新儒教を形成、深化させた北宋期の知識人の生涯と思想を考究。8400円

石川忠久著作選Ⅲ

全5巻別巻1

東海の風雅

日本漢詩の心

日本漢詩の解釈は中国文学者の仕事と断ずる著者による論考を集成。第3回配本 3465円

湯浅邦弘著

戦いの神

中国古代兵学の展開

中国古代の戦争神・蚩尤の変容を追いつ戦争観・平和観を考察。秦漢・唐宋に及ぶ。7875円

菊地章太著

フランス東洋学ことはじめ

ボスフオラスのかなたへ、その成立ちをフランス文化のなかでたどる。研文選書981995円

研文出版

東京・神田神保町2 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

注は各姓氏の記事の後に置かれる、などの措置で、文章は読みやすくなった。また、引用の書名の巻数は漢数字を並べる(例えば巻七三)書き方に改め、文末の「也」「焉」などの語は基本的に省き、必要な場合は適切な語を補った。また、旧版では「薇元」としていた自称を「余」に改め、「諛」は「訛」に書き換えている。

以上は小さな修訂である。修訂で重視すべきは誤りの訂正と加筆である。旧版の誤りの訂正というが、大小様々で、誤りの故なのか不適切の故なのか分からない削除部分を含めると、かなりの数にのぼる。それらの多くは、巻数の違い、書名・篇名の間違い、括弧の位置の付け間違い、句読点の間違い、文字の間違いといった、いわば旧版の単純ミスで、特に問題になる訂正ではない。はつきりと内容の修訂といえるものは、それほど多くはない。例を挙げると、「祠部員外郎豆盧友」とあったのを「監察御史豆盧友」と改めているが(一〇六頁)、石刻に従っていたのを改めて『新唐書』の記載に従ったことが注で判明する。また五胡の夏国を

建国した赫連勃勃が「赫連」と改姓した理由について述べる部分は(二六六頁)、論旨には変更はないが文章は書き換えられている。また秦の丞相「隗林」は「隗状」と改められ(三三四頁)、注でその根拠が示されている。

格別誤りの訂正を伴うわけではない加筆が別にみられる。例えば、卜氏については(一五九頁)、注にあった部分を本文に組み込むなど大幅な書き換えが行われているが、このほかにも、元氏(六頁)、白氏(三一九頁)では、注を含めたかなりの量の書き直しがなされている。事例の増加もこの書き直しの中に含めてよいであろう。例えば、宇文氏(一八三頁)では、北周で宇文を賜姓された者として、王悦・柳慶・韓雄の三名の事例を加えている。書き直しという点で注目されるのは羯族と西域の諸姓に関わる部分で、康氏(四〇八頁)について本文だけで六行の加筆を行っているのははじめとして、加筆や書き直しが目立つ。なお、外篇の羌族諸姓の項目名とそれに属する一二姓の説明において、旧版ではすべて「西羌」と

なっていたことも書き直しの例に含めることができる。

修訂版の引用書目を旧版のそれと比較してみると、新しく加わったものが五冊ある。いずれも近代の研究書に類するものである。これらを参照することによって著者は旧版の修訂を営々と続けられたのであろう。修訂された箇所が少なくないことを確認して、あらためて著者の真摯な研究態度に頭の下がる思いがする。

とはいえ、本書の基本は五〇年前にできたものである。その後の民族関係の研究の進歩はめざましいものがある。特に強調しないといけないのは、近年における石刻史料の著しい増加である。本書は石刻史料に並々ならぬ注意を払っているのであるが、引用書目には趙万里氏の『魏晋南北朝墓誌集刊』科学出版社、一九五六(一)は挙げられていない。墓誌関係書の刊行のみならず、新出、あるいは新蔵の墓誌拓本を大量にみることで、墓誌以外にも関係石刻史料をみることで、よりよくなった状況下、現在の我々は本書を

新刊案内

談話言語学概論

王福祥 著 高橋弥守彦・続三義 訳

《話語言語学概論》（外语教学与研究出版社、一九九四年）を翻訳。中国語の構造を、まとまり性のある二つ以上の文から一編の文章まで、大きな単位で分析するための格好の概説書。

A5判
■13650 円

補う多くの事例を知りうる。一例のみ挙げておこう。『文物』二〇〇七年七期号に紹介された「大代持節幽州刺史山公寺碑」（北魏の正始元年建立）の碑陰には多数の漢族、非漢族（羌族中心）の姓名が記載されるが、そこには本書に記載される雷氏などのほかに、昨和・俱烏・大非・丁尾・維定・地連・作封・末代・者非・蓋同という非漢族と思われる姓がみられる。また関係墓誌の出土などにより中国におけるソグド人の果たした役割に全くといってよい新たな視点が提供されていること（森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社、二〇〇七、参照）は、特に西域諸姓に関しては本書の理解では十分でないことを示すであろう。

ではあるが、本書はなお大きな価値をもっていると考ええる。新しい資料が発見されても、それを検討する場合にまず手に取るのは本書であろうからである。新しい材料をもって本書の内容を豊かにして行く、それが私たちの今後のつとめではなかるうか。少なくとも私はそうしたい。

その際に気をつけたいことがある。私たちは本書をあまりにも「工具書」として便利使いし過ぎてはいなかっただろうか。本書は、当時の非漢族のあり方に關する著者の深い理解があつてできあがつている。そこにもつと耳を傾けるべきではなかったか。修訂版を手にしての反省である。

なお、本書には、行論中にも引用される著者の論文「宋書索虜伝南齊書魏虜伝北人姓名考證」（『清華學報』八一、一九三三）と、旧版になかった陳寅恪氏の序文が付されている。

（くぼさきえ・よしふみ お茶の水女子大学名誉教授）

敦煌変文「王昭君変文」 『明妃傳』の研究

堀江恭子 著

敦煌変文中の「王昭君変文」「明妃傳」の復元と解析を主目的とし、『王昭君説話』の誕生とフィクション化の変遷を網羅的に検証。

A4判 ■18900 円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp